（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	小林 哲也
論文題目	W・ベンヤミンの思考の展開--内的憧憬と外部空間--		

（論文内容の要旨）

本論文は、ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンの思考の独自性に注目し、その内実を明らかにするとともに、その発展を初期の青年運動の時期から、中期のパリ亡命にいたるまでの時期にわたって追跡したものである。全体は、３編８章から成る。

第１編「外部への憧憬／体験の外の沈黙」では、自明のものとして存立している主観世界の外部にある「何か別のもの」「より高きもの」へと向かおうとするベンヤミンのラディカルな思考の萌芽、のちのベンヤミンの思考の核心となるものが、すでに彼の青年期の思考の営為のうちに見出されることが論証される。

第１章では、この「より高きもの」への内的憧憬が、ヴィネケン派の青年運動のなかでのG・ヴィネケンに対する共感と反発のうちに現れているさまが具体的に描き出される。

つづく第２章では、これが、戦争へと若者ならびに共同体を熱狂的に駆り立ててゆくM・ブーバーの象徴的な言語使用に対する批判となって現れ、この批判が、若いベンヤミンを、伝達の外部にある沈黙へと向かわせてゆくさまが克明にたどられる。

そして第３章では、こうしたベンヤミンの思考活動が、青年期の特異な言語論「言語一般および人間の言語」において、主観中心的な思考から沈黙へと脱してゆく非伝達的な言語論へと結実してゆくさまが描かれ、その流れのなかで、この難解な言語論の核にあるものが何であるかが、ベンヤミンの具体的な思考実践と結びつくかたちで説明される。

第２編「不透明な反抗、不透明な希望」では、青年期ベンヤミンのこうした内的憧憬と沈黙への志向が、沈黙を通しての現実に対する反抗と希望というかたちに収斂してゆくさまが、彼のギリシャ悲劇論ならびにゲーテ論の綿密な読解によって明らかにされる。

第４章では、「何か別のもの」へのベンヤミンの内的憧憬が、運命のごときがんじがらめの不透過な現実のなかで、いかなるかたちをとりえたかが、運命を打破せんとしながらも沈黙のうちに滅びてゆかざるをえないギリシャ悲劇の英雄（「ゲーニウス」）の反抗のありようのうちに浮かび上がらせられる。こうした沈黙のなかでの反抗にこそ、弱々しいながらも真の意味での「希望」のありかを見ようとする志向が、このあとのベンヤミンの思考の骨格を形作っていることを示すのが、この章の狙いである。

つづく第５章は、ベンヤミンが、そうした「希望」を、ゲーテの小説『親和力』のうちに読み込んでいるさまを明らかにしてゆく。小説の登場人物たちは、不透明な本性（自然）、デモーニッシュな二義性にとらわれたまま、「より高きもの」を目指して現実を脱してゆく決

断ができないまま滅びてゆかざるをえないが、ベンヤミンは、こうした事態を芸術的仮象のうちにのみ描くゲーテに対して批判の鉾先を向けると同時に、このゲーテの諦念に満ちた沈黙のうちに、なおも純粋な「至福」を求める志向が、「不透明な希望」のかたちで浮かび上がっているのを読み取ろうとした、という点を論証するのがこの章の狙いである。ここで示されるのは、沈黙の言葉を聴き取ろうとするベンヤミンの思考の独特のありようである。

第３編「カール・クラウス論　「非人間」による純化」では、こうしたベンヤミンの思考が、歴史と社会を舞台としていかなるかたちで展開されていくかが、難解きわまりないエッセイ「カール・クラウス」の読解のうちに論じられる。ここで問題となるのは、もはや沈黙そのものではなく、むしろ饒舌の背後に隠れた沈黙であり、罪にまみれた「世界撹乱者」としてのクラウスのうちに潜む、「より高きもの」への反転（「純化」）へと向かう「非人間」としてのありようである。

ベンヤミンはクラウスを、「全人間」「デーモン」「非人間」の三つの相のもとに見ているが、それに沿ったかたちで、第６章ではまず、コミュニズムを信奉する左翼知識人でありながら「全人間」的社会改良者であることを拒否するクラウスの姿が、当時のオーストリア社会民主党との関係のうちに具体的に描き出される。クラウスは、普遍的人間性（「全人間」）を理想に掲げるヒューマニズムの枠にはおさまらない。その本質は、現実の資本主義社会の罪にまみれた「デーモン」性、「人食い」性にある。

第７章は、この「デーモン」「人食い」としてのクラウスの姿を、とりわけF・ヴェルフェルとの関係のなかに描き出すとともに、クラウスが閉塞した現実のなかで、自然的本性のうちにがんじがらめにとらわれ、罪まみれになっているさまを活写する。

そして最後の第８章では、そうした罪まみれの「デーモン」クラウスにこそ、「天使」、すなわち真に「より高きもの」へと反転してゆく「非人間」の姿が浮かび上がっていると結論づけられる。この「非人間」の反転にこそ、希望をつないでゆくベンヤミンの思考の可能性があるというのが、本論全体の結論となっている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、現代思想の領域で今日なおさまざまな観点から多くの研究者の関心を引いているドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンの独特の思考のありようをめぐる理論的研究であり、また、ベンヤミンの思考が青年期のどのような状況のなかで生み出され、どのように展開していったか、その発展の経緯を具体的に明らかにしようとした歴史的な研究でもある。

ベンヤミンの思考の独自な点は、たとえばその「静止状態の弁証法」に典型的に見てとれる。テーゼとアンチテーゼを、主観のうちにいわば自動的にジュンテーゼへともたらすのを拒否し、その一歩手前で思考を停止させ、テーゼとアンチテーゼの緊張した対立のうちに主観の外部としての開いた場を確保しておこうとする思考法、主観のうちに閉じた思考を拒否し、思考を主観の外部に向けて解き放つ思考法である。本論文の学術的な価値はひとえにこの点にかかわっている。それは以下の３つの局面において指摘することができる。

１）本論文は、このベンヤミンの独自な思考の源を、これまであまり立ち入った研究がなされてこなかったベンヤミンの初期の青年運動に細かく分け入ることによって、明らかにした。本論文はこれを、G・ヴィネケンの教育思想に対するベンヤミンの共感と批判のうちに、「主観とは異なるより高きものへの憧憬」として取り出すとともに、この憧憬がやがて、「ユダヤ体験」をめぐるM・ブーバーの言語の象徴的な使用、ならびにそれにもとづく戦争肯定に対する根底的な拒絶と絡まりつつ、ベンヤミンのその後の思考の核を作っていったと指摘する。

この指摘は、資料的にも綿密な裏付けをそなえており、ベンヤミンの思考形成を見るにあたってきわめて斬新かつ妥当なものだと判定できるし、今後のベンヤミン研究において重要な示唆を与えるものと高く評価できる。加えて、このような見方をとることによって、ベンヤミンのきわめて抽象的な言語形而上学「言語一般ならびに人間の言語」が、なぜこの青年運動の時期に執筆されたのか、これを書かせた現実的動機が何なのかがはっきり見えてくるとともに、沈黙へと向かってゆく彼のこの初期言語論の内実の理解にも、現実的な地平を踏まえたうえでの新たなアプローチが可能になってくる。

２）本論文は、初期のベンヤミンにおけるこの「主観の他者への憧憬」が、やがて彼のギリシャ悲劇論、ゲーテ論へと流れ込んでゆき、運命を強いてくる共同体と、この運命を沈黙のうちに打破せんとする個の格闘という--「運命と性格」ないしは「暴力批判論」に典型的に見られるような--ベンヤミン的主題を形づくってゆくことを明らかにした。ギリシャ悲劇の英雄の沈黙を、ゲーテ『親和力』の登場人物たちの沈黙と結びつけることによって、自らの自然性にとらわれたわれわれ人間が、がんじがらめの現実のなかで、理想と希望をいかにして打ち立てることができるかを、G・ルカーチやC・

シュミットとはまったく異なったかたちで想定するベンヤミンの姿を描き出す本論文の手法には、いささか論の不十分なところもあるとはいえ、他に類をみない斬新な視点がうかがえる。と同時に、ここには、主観の外部と正面切って対峙しようとするベンヤミンの思考の骨格が二重写しにされており、その点でもベンヤミン研究にとって大いに刺激的な価値のあるものだと評価できる。

３）本論文は、ベンヤミンの難解なエッセイ「カール・クラウス」に注目し、クラウスの思考やジャーナリズム活動に詳しく立ち入ることで、クラウスについてのわが国で数少ない貴重な研究論文ともなっていると同時に、ベンヤミンの思考とクラウスの思考との同質性を、閉塞した主観世界を内在的に突破してゆくという点に見出すことによって、ベンヤミン研究に新たな視点を切り開くことにもなっている。ベンヤミンの描くクラウスは、普遍的人間性を掲げるヒューマニズム（「全人間」という理想）に向かうのではなく、むしろ「デーモン」にあえて身を落とし、理想を主観の外部へと破壊的に引用することによって、これを現実的ヒューマニズムへと変容させている。本論文は、このことをつぶさに論証することによって、そこに、不透過な外部へと向かうベンヤミンの独特の思考のありようをオーヴァーラップさせるとともに、クラウスを通してベンヤミンの思考の核心を「非人間」の反転として一般化して打ち出すことに成功しており、その点でも今後のベンヤミン研究に新たな道を指し示すものとして、大いに評価できる。

本論文は、ベンヤミンについてのモノグラフではあるが、ベンヤミンの生きた２０世紀前半のさまざまな思想的動きや政治的動向についてもきわめて広範かつ緻密な目配りができており、その意味で、広く２０世紀ヨーロッパ思想史の研究に新たな一歩を開く可能性をもったものとして、思想史の面でも今後が大いに期待されるところである。

以上を総合して、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２６年１月２７日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版事情が許すまでのあいだ当該論文の全文に代えて、その内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降